

「何もないギデオン？」

士師記 6 : 1 - 15

September.28.2025

士師記 6 : 1 - 15 (パワポ)

Preface

今朝はギデオン礼拝ですので、せっかくなので、士師ギデオンについて記されている御言葉から考えていきたいと思われました。

今読みました士師記に記されている神の民イスラエルの状態は、1 節と 6 節にありますように、主の目に悪であることを行っていたために、霊的にも肉的にも社会的にも非常に弱くなっていました。

唯一まことの神を知り、信じ、導かれたゆえの祝福を放棄するかのように、主の目には悪であるけれども、それぞれ自分たちの目には良いと思えることを行っていました。

そういう中で、一人の人が、主によって召し出されます。

一介の小市民、ギデオンです。

この聖書箇所を何度か反芻しながら考えていますと、ギデオンのここでの心持ち・心境のみならず、ギデオンの言葉に投影されているイスラエルの民たちの心境が感じられました。

「私には何もない。私には、条件や能力や資格が備わっていない。あの人やこの人と比較して、何にもない」という他者との比較意識から来る自己卑下のような思いです。

15 節でギデオンは、

士師記 6 : 15 (パワポ)

私の氏族はマナセの中で最も弱く、そして私は父の家で一番若いのです。

と、他の人との家柄を比較しながら嘆いています。

また、引き合いに出す必要もない年齢まで引き合いに出しながら人と比較し、出来ない、諦める理由を当たり前のように口にしています。

もちろん、物事によっては、年相応、年齢をわきまえる必要のある事柄もあるかと思いますが、ここでのギデオンの発言は、そういうことではないようです。

ただただ、比較意識に苛まれ、比較意識に己を支配され、決して他者との比較を求めることのない主なる神様を正に見失ったかのような姿に思えてきます。

Part One

聖書を見ますと、人は、神との関係が壊れ、神の前にあって罪を犯すように

なってから、他者との比較の中で生きようになってしまったことが赤裸々に記録されています。

「この人と比較して、自分には、何がどれだけ備わっているのか。あの人と比べて、自分はどれだけ優れているのか。または劣っているのか」という比較競争の中で生きようになってしまいました。

最初に罪を犯した人間アダムは、自分の妻、自分自身であるはずの愛する妻エバと比較して、「私の方が、自分の方が、この女より正しい」と恥ずかしげもなく、いやむしろ正義感をもって、神の前に、森羅万象の前に自分の正しさを主張します。

聖書に記録されている神の言葉をずっと読んでいきますと、他の人との比較から来る劣等感、優越感、見下げたり、見上げたり、見下げられたり、見上げられたり、そしてそのことが発端となった争い、分裂分派という終わることを知らないかのようなある意味血生臭い比較の世界が、この世の中に展開されている、蔓延していることが描かれています。

私自身も、幼い頃から、ずっと比較の中を生かされて来たように思います。

今でも、トラウマのように残っている最初に身についた比較意識は、「あの子よりも成績がいいのか、この子よりも点数がいいのか、あの人よりも偏差値の高い学校に行ったのか行かなかったのか」という比較です。

もし生きていましたら、今年で99歳になったであろう私の父が、日本国籍を剥奪された在日韓国朝鮮人として、日本という社会の中で生き抜く上で、日本人ではないという比較の中、常に負い目のような、劣等感のような思いを感じるようにされ続けたその痛みが、私自身も大人になって、家族をもって社会の中で生きていますと、理解出来なくような思いに至りました。

父が、幼かった私に、この日本社会で生き抜く上で、生き残るために、必ず身につけさせたかった条件は、学歴でした。

日本人ではないという負い目や差別を、この国で生き抜く上で少しでも我が子に感じさせないために身につけさせたかったのが、より良い点数、より良い学校という学歴でした。

そのため、小学校3年生の頃から塾に通わされ、4年生から週6日または週7日、日曜日にも二つの塾を掛け持ちしながら、所謂いい中学校に入るために、毎日を比較という価値基準の中で引きずられるかのように過ごしていました。

戦争や侵略という時代の荒波に翻弄される中で、父自身が備えることの出来なかったモノを我が子には身につけさせて上げたいという優しい親心、今となっては、私のことを心底思っていることだと思えますが、当時の幼い私にとっては、苦しくて、怖くて、試験の結果が父の機嫌を左右するということが恐ろしくて仕方ありませんでした。

そんな、幼い頃から、他の人との比較という物差しによって生きて来た私の中で築き上げられた比較意識から来る優越感は、イエス様に会いますと、ただただ生まれながらにして元々高慢な者であるがためなんだと悟られました。

また劣等感は、ともすると卑屈になり、隠すことも出来ない、垂れ流しのよう生まれながらにしてずる賢い罪人であるためなんだということを否応なしに悟られました。

かといって、そのずる賢さだったり、高慢さだったり、卑屈さが、クリスチャンになったからと言って、直ぐに消えて無くなるわけではなく、使徒パウロ先生の言葉を借りるならば、「本当にみじめな人間」(ローマ7：24)であることを、感謝なことに、恵みのうちに気付かされます。

「本当にみじめな人間」なのに、なぜ恵みとか、感謝とかと言えるのか？

これまた使徒パウロ先生の言葉ですが、「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています」(Ⅱコリント6：10)。

「何も持っていないようでも、すべてのものを持っています」という、まことの神を知り、唯一まことの神を信じる者とされ、イエス・キリストゆえに神の子として、神の国を、御国を受け継ぐ者とされたという特権・祝福が、神より与えられた特別な権利なんだと、これこそ決して消えて無くなることのない祝福なんだと思えるように変えられたからこそ、恵みであり、感謝です。

自分のみじめさを神の前にあって知れば知れるほどに、受けたものがどれだけ大きなものであり、祝福であり、恵みであり、感謝を覚えることが出来ます。

何にもないみじめさ。みじめさに気付けたことが祝福です。

何でもないみじめなもので自分という人を着飾らせ、比較において上に立とうとするみじめさに気付けば気付くほどに、「これからは、消えてなくなるみじめなものに執着しないように努めたい」と、そう努めながら生きられる誰かとの比較という束縛からの解放、自由に、恵みと感謝を覚えるばかりです。

それでも悲しいかな、休むことなく常に比較を叫ぶ世の中を生きていますと、毎日、比較意識に苛まれ捕らわれながら、あたかも、比較をもって人の価値を計ろうとすることとは無縁のイエス様を、父なる神様を忘れてしまったかのような比較のスパイラル、連鎖、生き方に陥ってしまうことがあります。

今ギデオンは、そんな負のスパイラルの中に陥っているんだと思います。

神様からどんなに、「わたしがあなたを導き出した。わたしがあなたを助けた。わたしがあなたがたにその地を与えた。力ある勇士よ。主なる神があなたとともにおられる」と語りかけられても、「あなたのその力をもって、人々を救うのだ。わたしがあなたを遣わすのではないか」と言われても、全くもってその言葉が入って来ません。

イスラエルの民たちも、同じような心境だったでしょう。

思い浮かんでくる思いは、「力なんかない。家柄もない。経験だってない。お金だってない。人から馬鹿にされるだろうし、見下げられるだろうし、失敗しか思い浮かばない」という思いばかりです。

比較意識に捕らわれたところから聞こえてくる声ばかりです。

Part Two

人を比較意識の悪循環に陥れ、その比較意識の中ですべての物事が動くように誘い、比較をもってこの世界を作り上げ、比較をもって人の心を掌握し、なおさらに掌握しようとしているのが、まさにサタンであり、悪魔なんだと思います。

創世記3章を見ますと、蛇に化けた悪魔が人をどんな言葉で誘惑し、比較を迫っているかと言いますと、「あなたがたが神のようになって」と、大胆にも、恐れ多くも、人に対して神との比較を迫っていきます。

人という存在は、天地万物をお造りになった造り主なる神によって造られた被造物であることを忘れさせるかのように、神との比較をもって人間に近づき、人間を誘惑し、人はまんまとその誘惑を受け入れながら「神のようになりたい」と、「造られる側ではなく、造る側になりたい、なれる」という錯覚・幻想に陥り、結果、誰がより刺激的な、奇抜な、(実際は何の新しいこともないのに)新しく見えるそぶりをした、優れているように見える、または、優劣を決めるありとあらゆる基準と目標を作って、比較というぐちゃぐやにこんがらがった、人の生きる道のように見せかけているモノだらけの世界をここまで作り上げてきて、なおも、比較の世界で、何か結果を出そうと意地を張り続けています。

もちろん、人間に与えられている何かを作り出すという能力は、神の似姿に造られたゆえなのでしょうが、度が過ぎて、自分たちで作ったものによって自分たちの首を絞めるかのような、自分たちが作ったものを神に代わる偶像 Idol としてしてしまったかのような世界が、今のこの世界なのかもしれません。

アメリカの科学雑誌が発表している「世界終末時計」という指標で、2025年1月現在において、この世界の残りの時間は、89秒だそうです。

核兵器のリスク、気候変動の深刻化、偽情報・誤情報の拡大、技術的な脅威、人の過ちゆえに新しく出てきたり再び出てきたりする病原体などによって、残された時間は89秒なんだそうです。

神を忘れて、人が互いに比較し続けてきたところ、自分たちの首を絞めるようなことになっています。

「教会成長」という言葉が、キリスト教会の中で、または神学という世界の中で一世を風靡しました。

今も、その言葉の影響下にあるかもしれませんが、そもそも、ここで言う「成長」という言葉自体が、経済活動というこの世の中で最も尊重され、そのことのためなら命さえ捨てることを求められるほどの価値観から生み出されたモノであり、安易にもそれを、キリストの代価によって生み出された尊い教会に用いて表現してきてしまったということに、反省の念をもって、ここ最近になって指摘されるようになって来ました。

いつの間にか、教会も経済原理に乗かって、他の教会と比較するために、「教会成長」という言葉を使ってきたということです。

フラー神学校のある先生は、これを、世界にフランチャイズ展開しながら成長するビジネスモデルを築き上げてきた世界的企業マクドナルドに準えて、マクドナルド式教会成長と表現しておられました。

教会もいつの間にか、その規模を誇り、経済力を誇り、人の数を誇ることを通して優越を覚え、劣等感を抱いてきたことを、私たちクリスチャンたちはしっかりと見極め、反省しなければならないように思います。

私たちが目標とし、私たちの祈りであり、私たちが主から期待されていることは、キリストをかしらとする、キリストの体として、キリストの身丈にまで、キリストに向かって、一つとなって、ともに成長することです。

誰かと比較して自分の方がより努力しているとか、より働いているとか、より敬虔だとか、より優れているという成長ではなく、ともに、キリストにあって、互いに、一緒に成長するのです。

Part Three

旧約聖書に登場してきますイスラエル民族、イスラエルという国は、それまでのどの民族・国も経験しなかった、何とも幸いな特権のような恵みを神から頂いた人たちでした。

まっさらな土地を与えられ、まっさらな機会を与えられ、過去や伝統や文化などという人の作り上げてきた良いも悪いもごちゃ混ぜになったモノから解放されたまっさらな状態から、国を建て上げ、民族を作り上げ、本来あった何物にも縛られることのない、比較とは無縁の人としての姿を全う出来る機会を、そして、神によって生かされるという本来の人らしい姿を世に示す使命を、歴史上唯一与えられた民たちでした。

比較することをもって価値を決めることとは無縁の唯一まことの神、天地万物をお造りになられた愛なる神のみを神とし、他の何物をも神としない生き方をまっさらな状態から始める特権に預かった人々が、旧約聖書に登場するイスラエルの民たちでした。

ところが、やっぱりと申しましょうか、残念ながらと言いましょ、どうしようもない罪の性質が、再び神を忘れさせ、神の言葉よりも人の言葉に頼り、

神ではないお金を神とし、また、自分を神のようにしたいという比較の世界に浸って行ってしまいました。

そうして、神を見失い、社会が乱れ、神の民とは名ばかりの、他の国と比較しても何ら変わらない神の目に悪であることを、それぞれ自分たちの目に良いと思えることを行う民族を、国を作り上げてしまいました。

その結果、無いものばかりが目につき、無いと思えてしまうがために、他の人が持っているモノが無いことに対して不憫に思えるようになってしまいました。

そして出て来た言葉が、ギデオンの発した、「あれもない、これもない、何にもない」という自己卑下の言葉だったのでしょう。

使徒パウロ先生の、「何も持っていないようでも、すべてのものを持っています」という神のうちにあって見える世界が、全く見えてなくなってしまったということでしょう。

Part Four

神の子、神が人の姿をとっていらっしゃった主イエス様がこの地にお生まれになった時、何もない人としてお生まれになりました。

あたかも、この世のどんなものも、神の前にあってはちりあくたに過ぎないということを体現するかのような姿で、お生まれになりました。

救い主、メシアを待ち望んだ人々は、歴史上のどの王よりも勝ってきらびやかで、軍事力を誇り、富を誇り、家柄を誇れるような者としてのメシアの到来を待ち望みましたが、イエス様は、そんな間違った、空しい、比較意識に捉われた人々の期待に、肩透かしを食わずかのようにお生まれになりました。

言い換えますと、ちりあくたのようなもので、その人生を、そのいのちを満たそうとしている私たち罪人の澱んだ、濁った霊的視野に光を射して、本当のこと、まことのことが見えるようにして下さるために、何もない、何も持たない姿でお生まれになりました。

「何も持っていないようでも、すべてのものを持っています」というその告白に、真理に、悟りに私たちを至らせるために、敢えて見るべき姿も、輝きもないお姿でお生まれ下さったわけです。

せっかく比較という奴隷の身分から助け出され、導き出され、脱却させて頂いたのに、また比較という偶像へと身を委ねてしまったイスラエルの民たちに、神様は、ギデオンという一人の人をお立てになって、再び、絶対的な価値に生きる者へと救い出そうとしておられるのが、このギデオンの聖書箇所が語ろうとしている一つのことなんだと思います。

聖書は、私たちに語ります。

「私たち人間に、天の下で、イエス・キリスト以外に救われるべき名は与えられていない。この方こそ唯一の神であられ、人となって現れなされた神のお

姿なるお方であり、この方との関係こそが人にとってすべてであり、最も大事なことであり、比類なき宝である」と教えてください。

私たちがこの社会で生きていく上で、お金は大事なものですし、人も大事ですし、自分という存在も大事です。

でも、お金を神に代わる神とし、人を神に代わる神とし、自分を神に代わる神とするならば、そこには渇きしかありません。

どんなに注いでも決して満ちることのない底の抜けたかめを満たそうとすることに例えることが出来るかと思います。

イザヤ書で神様はこのようにお語りになります。

イザヤ書 31 : 1－3, 6 (パワポ)

「神ではない富の象徴であるエジプトを頼り、ただの人間であるエジプト人を頼り、馬や戦車という武器に頼り、人に頼り、そしてそれらのものに頼ろうとする自分の判断を正しいと思う者たちすべてが、助ける者も、助けられるものもすべて滅び果てる」と警告して下さい。

「神に帰れ」と真剣に語りかけて下さいます。

もう一箇所です。

イザヤ書 55 : 1－3 (パワポ)

「飲んでも飲んでも渇きを潤すことも、腹を満たすことも出来ないことばかりに目を向け、真に私たちを潤し、満たす、神の言葉に聞き、神の言葉に生きようとしなことが、あなた方の最大の問題であり、最大の解決である」と語って下さいます。

この世を生きる私たちにとって、最大の偶像はお金だと思います。

お金が嫌いな人はいません。みんなお金が好きです。

お金があれば潤うし、お金があれば満ちると思っています。

お金のために神様に祈ることは多々ありますが、神様のためにお金を用いることには躊躇します。

お金があれば幸せになれると思っていますし、不幸せなのは、お金がないからだと思えてしまいます。

もちろん、この社会で生きるためには、お金が必要です。

イエス様だって、そのことは否定なさいませんでした。

でも、お金は、私たちの渇きを満たしてはくれません。

お金は神ではありません。

人の言葉も私たちを潤すことは出来ません。

ましてや、本当にみじめな人間である自分という人をどんなに着飾り、備え、

身に着けさせたところで、満足ありません。

そこにあるのは比較だけです。

人と比較して、比較の波に揉まれて、埋もれて、いつの間にか滅びていくだけです。

Conclusion

ギデオンのような渇き、ギデオンのような心境、ギデオンのような自己卑下、ギデオンのようなあれもないこれもないという思いがお有りでしょうか。

ならば今、私たちがすべきことは、主に帰ることです。

主の言葉、聖書の言葉を、聖書を舐めないことです。

神の言葉に耳を傾けることを、生活の中で最も大事にすることです。

そうすれば生きますし、その良いものを食べたがゆえに、脂肪で元気づくことでしょう。

その食した御言葉に、聖霊なる神様は、ご自身の火によって聖なる灯を私たちのうちに灯して下さることでしょう。

ギデオンのような渇きを覚えたら、チャンスです。

神に満たして頂けるチャンスです。

お祈りいたします。

祝祷：イザヤ 55：3